

コントロール欲求尺度 (The Desirability of Control Scale)

日本語版の作成

安藤 明人

(武庫川女子大学文学部人間関係学科)

Construction of the Desirability of Control Scale for Japanese

Akihito Ando

*Department of Human Relations, Faculty of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan*

Abstract

This study was conducted to construct the Desirability of Control Scale for Japanese based on the scale made by Burger & Cooper(1979). 221 female college students filled out a Japanese version of the Desirability of Control Scale as a part of large test battery. The present Japanese version of the scale was found to have substantial internal consistency ($\alpha=0.732$), as well as discriminant validity from measures of locus of control(Rotter, 1966). Factor analysis of responses to the scale was performed by a principal-factor analysis with Varimax rotation. Three factors were extracted and could be labelled as follows : (1) a Leadership factor ; (2) a Decisiveness factor ; (3) an Avoidance of Dependence factor. These three factors were similar to the factors which were found by Burger et al. (1979). The results of the item analysis and factor analysis provided reliability and validity of the Desirability of Control Scale for Japanese and thus this scale was revealed to fulfill the essentially desirable characteristics of a psychological scale.

緒 言

心理学における多くの理論は、自分に関連した出来事がある程度コントロールできるという信念が、その人の心理学的・身体的幸福にとって重要な意味をもっている、という仮定に基づいている。そして一般に人は、自分が環境をコントロールしているという知覚は幸福な結果をもたらすが、コントロールできないと知覚するときは、ストレス、抑うつ、無力感といった不快な心理的・身体的効果を経験し、不適応的な結果をもたらす(Leary & Miller, 1986¹²⁾)。

Burger & Cooper (1979)⁴⁾は、この自分に関連した出来事をコントロールしようとする欲求には個人差がみられることから、安定した人格特性の一次元としてコントロール欲求 (desire for control) をとらえようとした。そして、個人のコントロール欲求の強さの程度を測定する尺度としてコントロール欲求尺度 (The Desirability of Control Scale) を作成した。

この尺度を用いてコントロール欲求の強さと他の行動との関連を調べたところ、コントロール欲求の強い人は、自分で決定するのを好む、潜在的にコントロールを失いそうな場面を避けようとする、集団場面でリーダー

シップを發揮する、といった行動特徴を示しやすいたことが明らかになった。反対にコントロール欲求の弱い人には、余分な責任を負うのを避ける、誰か他の人が自分のために決定を下すのを好む、といった行動特徴が見られた(Burger, 1985²⁾)。またこのコントロール欲求の強さの程度は、学習性無力感(Burger & Arkin, 1980³⁾)、ギャンプリング(Burger et al., 1979⁴⁾ ; Burger & Schnerring, 1982⁶⁾)、死に場所の選択(Smith, Wallston, Wallston, Forsberg, & King, 1984⁶⁾)、態度変容(Burger & Vartabedian, 1980⁷⁾)、抑うつ(Burger, 1984¹⁾)、混雑の知覚(Burger, Oakman, & Bullard, 1983⁵⁾)、撮る写真のタイプ(Henry & Solano, 1983⁹⁾)、といったさまざまな分野で、個人差の説明要因になりうるということが明らかにされている。

このようにコントロール欲求の概念は、さまざまな分野で人間の行動を説明する要因となり、重要な人格変数のひとつとして利用価値も高いものと考えられる。ところが現在、Burger et al. (1979)⁴⁾が作成したコントロール欲求尺度の日本語版はない。そこで本研究では、コントロール欲求尺度の日本語版を作成して、その尺度としての信頼性、妥当性を検討することを目的とする。

方 法

調査対象者

女子大学1年生221名を対象として、心理学の授業中に調査を実施した。調査は無記名で行い、回答者の個人名が特定できないように配慮したが、質問紙にあらかじめ記入されたID番号により、得られた結果は、後に各調査対象者に返却した。

質問紙

調査に用いた質問紙は、複数の性格特性および態度を測定するテストバッテリーを構成していた。

オリジナル版DC尺度 Burger et al. (1979)⁴⁾のオリジナル版”The Desirability of Control Scale”(以下、DC尺度と略す)は、以下のようにして作成され、その信頼性が確かめられたものである。

まず、コントロール欲求に関すると思われる文章を53項目集め、それによってリカート・タイプの尺度を構成した。被験者の反応は、「全くあてはまらない」(1点)から「いつもあはまる」(7点)までの7点尺度で求められ、その合計得点をコントロール欲求得点とした。

この53項目からなるDC尺度を用いて、453名の大学生を対象に予備調査を実施し、尺度の内的一貫性を高めるために項目分析を行った。まず、Nunnally (1967)¹³⁾の方法に基づいてKruider-Richardson 20信頼性係数(r_{xy})を算出し、相関の低い項目を削っていき、最終的に20項目を選んだ。この20項目からなる尺度のKruider-Richardson 20信頼性係数(r_{xy})は0.80であった。

この20項目からなるDC尺度の安定性を調べるために、予備調査を行った被験者の中から31名を選び、6週間後に同じ尺度を実施した。その結果、検査-再検査信頼性係数は0.75が得られた。

つぎに、この尺度が確かにコントロール欲求を測定していることを確認するために、弁別的妥当性の検討を行った。このために、このコントロール欲求と概念的に類似しているLocus of Controlとの関係について調べた。予備調査を行った被験者の内、268名に対して”Rotter Internal-External Locus of Control Scale”(Rotter, 1966¹⁵⁾)を実施し、20項目のDC尺度とRotter IE尺度との相関を調べたところ、この2つの尺度は低い負の相関を示した($r = -0.19$)。この結果より、DC尺度とRotter IE尺度は、異なった概念を測定していることが明らかになった。

さらにDC尺度に、社会的に望ましい回答をしようという被験者の回答傾向の影響があるか否かを検討するために、予備調査の被験者の内360名について、併せて”Marlowe-Crowne Social Desirability Scale”(Crowne & Marlowe, 1960⁸⁾)を実施した。この2つの尺度の間には、低い正の相関($r = 0.11$)しか認められなかった。この結果より、DC尺度は、被験者の社会的望ましさの影響をほとんど受けていないことが確認された。

日本語版DC尺度 Burger et al. (1979)⁴⁾が作成した20項目からなる尺度を日本語に翻訳した。このうちオリジナル版の2つの項目は、被験者が自動車を運転しないと答えられない項目であった。しかし今回の被調査者は自動車免許を持たない者のほうが圧倒的に多いので、この項目は日本語版には不適切であると考え、できるだけ内容を変えないようにして自動車免許の有無にかかわらず答えられる内容の項目に変更した。

各項目に対する回答は、オリジナルと同じ7件法で求めた。用いられた反応カテゴリーは「まったくあてはま

らない」「ほとんどあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「だいたいあてはまる」「かなりあてはまる」「非常によくあてはまる」であり、それらには1から7の回答選択肢が割り当てられていた。各項目に対する回答は、コントロール欲求が強いほど高得点になるように1点から7点で得点化し、20項目の合計得点をDC尺度得点とした。したがって得点可能範囲は20~140点である。

その他の尺度 質問紙を構成し、今回のDC尺度の妥当性の検討に用いたその他の尺度は、Locus of control(鎌原・樋口・清水, 1982¹¹⁾), 独自性欲求(岡本, 1985¹⁴⁾), 自己モニタリング(岩淵・田中・中里, 1982¹⁰⁾), YG, CMI, である。

結果と考察

項目得点と総得点との相関

DC尺度20項目の各項目の得点を単純加算した総得点は41点から118点の間に分布していた。総得点の平均は88.8(SD=11.9)であった。この総得点と各項目得点の相関関係がTable 1に示されている。これをみると、項目6, 7, 19を除く17項目は十分に高い相関を示しており(いずれも1%水準で有意), このことより、この17項目は被験者の識別力が高いと判断できる。

上位-下位分析

被調査者の中からDC尺度の総得点の上位群25%(N=53)と下位群25%(N=54)を抽出した。上位群の総得点の平均は99.9(SD=6.06), 下位群の平均は69.0(SD=6.49)であった。この上位群, 下位群それぞれについて、各項目の平均値を算出し、その有意性をt検定により検討した。Table 1には、各項目について上位群と下位群の平均値の差(D)が示されている。これによると、項目6, 7, 19以外はすべて1%水準で有意差が認められた。有意差が認められなかった3項目は、他の項目との等質性が疑わしいと判断される。

内的一貫性

作成されたDC尺度日本語版の信頼性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出すると、0.732が得られた。この α 係数は、一般に0.8以上であると、その尺度は内的一貫性が高く、信頼性が高いと判断される。したがって、DC尺度日本語版の内的一貫性は満足できる水準には達していない。Table 1をみると、項目6, 7, 19がDC尺度の総得点との相関が低く、内的一貫性を低下させていることが推測できる。また上の上位-下位分析でも、この3項目は他の項目との等質性が疑われたので、この3項目を除いた17項目を対象として、再度 α 係数を算出すると0.787が得られ、内的一貫性は向上した。しかし0.8の水準にはわずかに届かなかった。

他の尺度との関連

このDC尺度日本語版の妥当性を確認するためには、この尺度が確かにコントロール欲求を測定していて、それ以外の特性を測定しているのではないことを証明する必要がある。つまりこの尺度の弁別的妥当性(discriminant validity)を吟味する必要がある。そのために、他の性格・態度測定尺度との関連について検討してみる。

まずこのDC尺度との関連が検討されなければならない尺度は、Locus of Control尺度である。Burger et al. (1979)⁴⁾は、この2つの尺度が表面的には類似しているように見えるが、お互いに独立した次元を扱った尺度であると述べている。すなわち、Locus of Control尺度は、事象をコントロールできると信じている程度を測定しているのに対して、DC尺度は、事象をコントロールすることをどの程度魅力的に感じているかを測定していると考えている。そして前で述べたように、Locus of Controlとコントロール欲求の間に、内的コントロール志向の者はコントロール欲求も強いという弱い相関関係を認めたが、概念的には異なった次元を測定していると主張している。

そこで今回作成したDC尺度日本語版についても、同じようにLocus of Control尺度との相関を調べたところ、Table 2に示されているように、Burger et al. (1979)⁴⁾と同様、内的コントロール志向の強い者はコントロール欲求も強いという弱い相関関係が確認された($r=0.19, p < 0.01$)。しかし、DC尺度、Locus of Control尺度それぞれについて、それ以外の尺度との相関を調べてみると、2つの尺度はかなり異なった様相を示しており、この結果より2つの尺度は異なった次元を測定する独立した尺度であることが推測できる。すなわち、DC尺度は、私的自意識、公的自意識、自己モニタリングといった自己に関連した尺度と有意な相関を示

Table 1. Summary of item means, standard deviations, and item analysis

項目の内容	M	SD	項目-得点 相関	G-P分析 D
1. 私は何をいつするかについて自分で決められるような仕事を好む。	4.73	1.61	.52**	2.04**
2. 私は現在の政府にできるだけ発言権を持つために、政治に参加する。	2.66	1.43	.43**	1.65**
3. 私は誰か他の人が私にすべき事を指図する場面を避けようとする。	3.40	1.46	.38**	1.40**
4. 私はフォロワー（追従者）であるよりは、むしろリーダーであることの方を好む。	3.57	1.63	.62**	2.50**
5. 私は他人の行動に影響を与えることができることに喜びを感じる。	4.50	1.58	.56**	2.17**
6. 私は旅行に出かける前には、持ち物を入念に点検する。	5.37	1.54	.08	0.45
7. 私にとって何がベストか他の人はたいてい知っている。	3.28	1.32	-.02	0.15
8. 私は自分で自分の決定を下すことに喜びを感じる。	4.27	1.52	.60**	2.36**
9. 私は自分の運命をコントロールすることに喜びを感じる。	3.90	1.50	.52**	2.00**
10. 私は集団活動に参加している時、自分がリーダーであるよりはむしろ誰か他の人にリーダーシップをとってもらいたい。	4.60	1.58	-.49**	-1.95**
11. 私は自分が他人より、一般的にいろいろな状況をうまく操ることができると思う。	3.61	1.44	.46**	1.41**
12. 私は他人の命令に従うよりは、失敗してもいいから自分の思うようにやりたい。	4.50	1.51	.67**	2.65**
13. 私は仕事を始める前に、その仕事の内容についてすべて知っておきたい。	5.44	1.28	.47**	1.45**
14. 私はなにか問題に直面したときには、何もせずじっとして成りゆきにまかせるよりは、それに対して何かしてみる方を好む。	4.93	1.32	.43**	1.41**
15. 命令ということに関して言えば、私はそれを受ける立場より、与える立場に立ちたい。	3.96	1.53	.61**	2.40**
16. 私は毎日下さなければならない決定を他人にまかせることができたらいいのと思う。	3.46	1.35	-.37**	-1.11**
17. 私は何かするとき、他人の失敗のとぼっちりが自分に降りかかりそうな場面をできるだけ避ける。	4.43	1.37	.22**	0.90**
18. 私は誰か他の人が私のすべきことを指示する場面を避ける。	3.55	1.35	.31**	1.11**
19. 決定を下さなければならないというよりは、選ぶべき選択肢が1つしかない場面がたくさんある。	3.51	1.39	.08	0.35
20. 何か問題があるとき、私はそのことで悩まされなくてもすむように、誰か他の人がその問題を解決してくれるのを横で見ているのを好む。	3.24	1.47	-.29**	-1.04**

- 1) 反転項目は、7, 10, 16, 19, 20の5項目。
- 2) 項目6, 17はオリジナル版から内容を変更してある。
- 3) Dは、DC得点上位群25%の平均から下位群25%の平均を引いた値。
- 4) **:p<0.01 *:p<0.05

しているのに対して、LOC尺度はこの3つの自己に関する尺度とは相関を示さない。つまり、コントロール欲求の強いものは自己に目を向けたり、監視したりする傾向が強いという関連が認められるが、LOC尺度に関しては、そのような関連性はみられない。

Table 2. Correlations between DC and LOC and other scales

	DC尺度	LOC尺度
コントロール欲求	———	.193**
Locus of control	.193**	———
独自性欲求	.433**	.169*
私的自意識	.290**	-.077
公的自意識	.166*	.031
自己モニタリング	.316**	-.005
社会的スキル	.395**	.316**
自尊心	.238**	.418**
社会的支援	.175*	.444**
無力感	-.107	-.542**
D (YGテスト)	-.058	-.352**
I (YGテスト)	-.251**	-.325**
N (YGテスト)	.017	-.230**
CMI(精神的自覚症)	.053	-.345**

** : p < 0.01 * : p < 0.05

また、DC尺度はYGテストのI(劣等感)因子を除いて、それ以外の社会的不適応に関連した尺度(無力感、D、N、CMI)とは相関を示さないのに対して、LOC尺度はそれら社会的不適応を測定している5つの尺度と有意な負の相関を示している。つまり、LOC得点の高い内的コントロール傾向の強い者は、社会的不適応の程度が低いという関連が認められる。一方、DC尺度については社会的適応状況との関連性は認められない。

以上の結果より、DC尺度とLOC尺度は、コントロールの異なる側面を測定する独立した尺度であることが明らかになった。

因子構造

20項目からなるDC尺度の因子構造を明らかにするために、項目間の相関行列をもとに主因子法により因子分析を行った。この結果、固有値が1.0以上である第3因子までを採用した。さらに因子解釈の有意性を考慮して、この因子負荷行列にバリマックス回転を行った。この結果がTable 3に示されている。表は、各因子ごとに項目が因子負荷量の高い順に並ぶように、項目の順番を入れ替えてある。

第1因子には、他人から指図されるのではなく、自分でリーダーシップをとって物事を決定したい、という項目が高い負荷量を示しているの、「リーダーシップ因子」と命名した。第2因子は、自分で自分の決定を下すことあるいは運命をコントロールすることに喜びを感じる、という項目が高い負荷量を示しているの、「自己決定因子」と命名した。第3因子は、他人に従属したり、指図されたりする場面を避ける、という項目が高い負荷量を示しているの、「従属回避因子」と命名した。因子寄与率は、第1因子が12.5%、第2因子が12.0%であり、この2つの因子の説明力はほぼ同じであることがわかる。第3因子の寄与率は9.3%で、その説明力は前の2つの因子より落ちる。第3因子までの累積因子寄与率は33.8%であり、抽出されたこの3つの因子では、DC尺度に対する反応の全分散の3分の1が説明できるにすぎない。

Table 3. Summary of factor analysis on the desirability of control scale for Japanese

項目番号	第1因子	第2因子	第3因子
4	.794	.171	.080
15	.543	.201	.314
11	.453	.272	-.246
12	.450	.437	.151
10	-.791	-.008	.081

8	.127	.775	-.023
9	.099	.736	.005
13	.017	.456	.288
1	.267	.428	.090
5	.306	.422	.127

18	.111	-.002	.710
17	-.072	.032	.646
3	.083	.212	.498

2	.258	.264	-.090
6	-.236	.107	.154
7	.105	.127	-.163
14	.284	.301	-.122
16	-.267	-.244	.245
19	.121	-.045	.332
20	-.182	-.224	.369

因子寄与率 (%)	12.5	12.0	9.3

以上3つの因子は Burger et al. (1979)⁴⁾においても同様に見いだされた因子である。しかし、そこで見いだされた残り2つの因子(「一般的なコントロール欲求因子」「準備-予防コントロール因子」)は、本研究では、はっきりとした形では確認されなかった。

コントロール欲求尺度日本語版の評価

以上の信頼性および妥当性の検討により、今回作成したコントロール欲求尺度日本語版は、心理学的尺度としての要件をほぼ満たしていると評価できる。しかし、総得点との相関が低く、また上位-下位分析でも有意性が認められなかった3項目については、このままでは不適当であると判断できる。そのためこの3項目を除いて、17項目からなる尺度とすると、内的一貫性も高まりほぼ満足できる水準に達した。しかし、オリジナルの英語版で得られた結果との比較という点を考慮にいと、日本語版はオリジナルの英語版と基本的に同じ項目数のほうが望ましい。そこで、この3項目は日本語版から除外するのではなく、今後翻訳を再検討することにより内的一貫性を高めることをめざすほうが望ましいと考えられる。

また今回は構成概念妥当性の検討が行えなかったため、今後その点を吟味することによって、このコントロール欲求尺度日本語版の精緻化を図る必要がある。

引用文献

- 1) Burger, J.M., Desire for control, locus of control, and proneness to depression, *J. of Personality*, **52**, 71-89 (1984)
- 2) Burger, J.M., Desire for control and achievement-related behaviors, *J. of Personality and Social Psychology*, **48**(6), 1520-1533 (1985)
- 3) Burger, J.M., & Arkin, R.M., Prediction, control and proneness to depression, *J. of Personality*,

- 52, 71-89 (1980)
- 4) Burger, J.M., & Cooper, H.M., The desirability of control, *Motivation*, 3(4), 381-393 (1979)
 - 5) Burger, J.M., Oakman, J.A., & Bullard, N.G., Desire for control and the perception of crowding, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 9, 475-479 (1983)
 - 6) Burger, J.M., & Schnerring, D.A., The effects of desire for control and extrinsic rewards on the illusion of control and gambling, *Motivation and Emotion*, 6, 329-335 (1982)
 - 7) Burger, J.M., & Vartavedian, R.A., Desire for control and reaction to proattitudinal and counterattitudinal arguments, *Motivation and Emotion*, 4, 239-246 (1980)
 - 8) Crowne, D.P., & Marlowe, D., A new scale of social desirability independent of psychopathology, *J. of Consulting Psychology*, 24, 349-354 (1960)
 - 9) Henry, W.P., & Solano, C.H., Photographic style and personality: Developing a coding system for photographs, *J. of Psychology*, 115, 79-87 (1983)
 - 10) 岩淵千明・田中国夫・中里浩明, セルフ・モニタリング尺度に関する研究, *心理学研究*, 53(1), 54-57(1982)
 - 11) 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治, Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討, *教育心理学研究*, 30(4), 302-307 (1982)
 - 12) Leary, M.R., & Miller, R.S., *Social psychology and dysfunctional behaviour : Origins, diagnosis, and treatment*, Springer-Verlag, New York (1986)
 - 13) Nunnally, J.C., *Psychometric theory*, McGraw-Hill, New York (1967)
 - 14) 岡本浩一, 独自性欲求の個人差測定に関する基礎的研究, 56(3), 160-166 (1985)
 - 15) Rotter, J.B., Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement, *Psychological Monographs*, 80 (1, Whole No. 609) (1966)
 - 16) Smith, R.A., Wallston, B.S., Wallston, K.A., Forsberg, P.R., & King, J.E., Measuring for control of health care process, *J. of Personality and Social Psychology*, 47, 415-426 (1984)